

建築教育ニュース — NO 1

1963. 10

東日本建築教育研究会

## ○ 本会の事業と建築教育研究の概況について

理事長 中 江 齊

本会は昨年度の事業として、春の郡山工高における総会と、総会の協議に基いて12月における講習および研究協議会を実施いたしました。前者においては、研究発表、研究協議、講演を開催し、吾妻スカイラインの見学を行って会員の親睦を深めました。この総会での意議は、特に建築設備基準についての問題点と実験実習のあり方について検討を要するという事と、学習指導の手引の改訂に備えて科目の学習指導法を計画的に研究していこうということでありました。後者は昭和36年度から東京方面の賛助会の後援による実験技術の講習会と研究協議会を行い、12月には東京を中心とする理事諸氏の非常な御配慮で建設省建築研究所の御指導による構造実験の講習会を開催することができ、本会の会員校のみならず各地区からの参加者があり、それぞれ貴重な実験技術を修得することができたと信ずるものであります。また、工大附属工高において「建築材料」と「建築構造」の学習指導の研究授業と研究依頼校を中心とする研究発表がなされ、科目研究の第1歩をふみ出しました。

本年度に入って、科目の学習指導の研究はこれを継続するとともに、前年度からの課題となった実習のあり方をどうするかの問題を取上げ、この春の総会にその研究発表が活発に行われたことは、各校が建築教育にとって最も重要な問題にとり組んでいこうとする意欲の現われとしてまことに心強く感ずるものであります。

春の総会は水戸工高において開催されましたが、原口校長先生始め建設科の各位が綿密な計画を立てて下され、文部省河上職業教育課長の御出席を得て、茨城県の教育委員会・工高校長会の多大の御支援によって、本会最大の総会をもつことができました。このことについてはここに深く謝意を表したいと存じます。

37年度においてワークブック委員会は材料実験のシートを刊行し、全国の各校から予期以上の協力を得ましたし、神奈川工高の藤井先生による構造計算のワークブックも双文社から発刊されました。また本会が中心となって作製した全国工高建築関係教職員の名簿は、業界の応援もあって大変好都合に編集発行ができました。

本会本年度の後半の事業は、昨年度に引きつづいて全国の建築関係教職員名簿を発刊することと、11月に音響実験の講習並に見学会を開催することとであります。名簿の発行については、近畿工高建築連盟の関係において昨年度は本会として不注意による過誤がありましたが、同連盟の寛大な御容認と協力を得てこれを発行することとなりました。講習見学会は本年度も東京における賛助会の後援により、東大生産技術研究所の石井聖光博士の御指導と日本電子測器株式会社の協賛のもとに御案内のように実施することとなりました。これは計画実験の担当職員が指導上最も研修を必要とするものとして、この成果を大いに期待する次第であります。

○ 近畿工高建築連盟との提携について、

工高建築教育の研究は、学習指導手引の改訂の見通し、設備基準の改訂公示見通しに立って全国的な提携協力が必要となってきました。このような情勢にかんがみ、8月17日静岡工高において東日本建築教育研究会と近畿工高建築連盟の代表者の連絡懇談会を開催し、隔意なき意見の交換と懇談をいたしました。本会側は理事長中江斉、富塚信司氏(向の丘工高校長)池田寿男氏(川越工高主事)、井上厚宏氏(神奈川工高)、関一郎氏(岡工高)が出席し、近畿側は田中五平氏(彦根工高校長)益尾辰雄氏(都島工高)、田沢昭一氏(今宮工高)渡辺恭祥氏(彦根工高)が来会され、特に次のことを打合せました。

- ① 東日本建築教育研究会は現在の会員校地域とを海道との連携を、近畿工高建築連盟は近畿と四国・中国・九州との連携の緊密化をはかる。
- ② 将来全国組織の可否は別として東西の連絡協議会が持たれるように努力する。
- ③ 研究協議会、講習会、等の開催については相互に案内招請を行う。
- ④ 学習指導手引の改訂方針について9月末日までに東日本側の意見を近畿側に連絡する。近畿側は10月下旬の総会で検討し連絡を交換する。

これからも相互の連絡協議を密にして、工高建築教育の改善向上や問題点の解決をはかるために、全国の力を結集するように努力したいと考えます。

○ 日本建築学会教育委員会工高部会について

日本建築学会では、昨年度に重要度による工高建築用語の選定を行い、近く決定版を発刊されることになっておりますが、引きつづいて工高建築教育における実験実習のあり方について研究に入ることとなりました。本会でもこの問題を取りあげており、相互に協同の態勢をとっていくことがたいせつであると思います。

○ 岸内藤太郎、山田晃一氏の工高御退職について

本会の創設から今日まで本会の発展のために、おつき下さった岸内藤太郎氏(神奈川工高)、山田晃一氏(工大附属工高)の両氏が工高を御退職になりましたことは大変惜しいことではありますが、会則によって本会に引続いて御関係下さることを願ってやみません。

○ 38年度総会覚え書き

1. 期日、会場 昭和38年 5月31～6月1日  
茨城県立 水戸工業工高において

2. 参加校(順不同)

弘前工高、盛岡工高、仙台工高、白石工高、山形工高、秋田工高、能代工校、大曲工高、勿来工高、会津工高、郡山工高、日大東北工高、福島工高、市川工高、宇都宮工高、桐生工高、前橋工高、大宮工高、川越工高、熊谷商工高、鶴見工高、向の岡工高、横須賀工高、神奈川工高、川崎市立工高、小田原城北工高、横浜工高、小石川工高、葛西工高、蔵前工高、田無工高、

安田工高，関東高枝，芝浦工大工高，高田工高，新発田商工高，新潟工高，飯田長姫高，上田千曲高，長野工高，映南高，甲府工高，沼津工高，浜松工高，静岡工高，島田工高，金沢工高，武生工高，豊橋工高，岐阜西工高，大垣工高，（尼崎工高）（彦根工高）墨田工高，工学院大工高，東工大工高，水戸工高（中央職業訓練所）高崎工高（以上59校 81人）

（ ）内の学校は会員外

3. 昭和37年度 収入決算の承認

” 支出 決算書

4. 昭和38年度 予算の承認

5. 賛助会の報告

37年度

(1) 収入の部（研究会）

項 目	予算額	決算額	摘 要
繰 越 金	0	0	
会 費 収 入	41,000	53,000	36年度分 2校 37年度分 51校
演 習 書 収 入	40,000	48,277	工高長協会払 4,000
雑 収 入	0	19,622	銀行利子 2,622
合 計	81,000	120,899	寄 附 13,000

(2) 支出の部（研究会）

款 項	予算額	決算額	摘 要
事業費	65,000	93,925	
総 会 費	20,000	39,265	郡山工高
見学研究会費	30,000	42,770	秋季研究会
資料編集費	10,000	8,890	会誌発行
視察補助費	5,000	3,000	研究会打合
運営費	12,000	24,340	
役 員 会 費	3,000	2,900	
通 信 費	6,000	17,140	総会研究会，会誌，名簿その他
事 務 手 当	2,000	3,000	
雑 費	1,000	1,300	文具費，要覧など
予備費	4,000	0	
予 備 費	4,000	0	
合 計	81,000	118,265	

(3) 差引残高 2,634

※ 秋季研究会収支内訳

収 入	146,290	支 出	146,290
内 訳		内 訳	
本会支出	42,770	講師その他の謝礼	41,020
賛助会補助	38,520 ㊤	懇親会費	69,200
参 加 費	65,000	昼食・菓子	17,570
		印刷・準備打合	18,500
		そ の 他	

㊤ 賛助会の項 参照のこと。

38年度 予 算

前年度予算	本年度予算	増	摘 要
81,000	111,634	30,634	

(1) 収入の部 (研究会)

繰 越 金	2,634		
会費収入	50,000	50校を見込む	
演習書収入	45,000		
雑 収 入	14,000	工場長協会費	4,000
		寄 附 金	10,000
合 計	111,634		

(2) 支出の部 (研究会)

事業費	85,000	
総 会 費	30,000	水戸工高
見学研究会費	40,000	秋季研究講習会
資料編集費	10,000	会 誌
視察補助費	5,000	各種研究会
運営費	22,000	
役員会費	3,000	
通 信 費	15,000	総会研究会誌
事務手当	3,000	名簿 その他
雑 費	1,000	
予備費	4,634	
予 備 費	4,634	退職理事への記念品代
合 計	111,634	

賛助会 37年度 決算

(1) 収入の部(賛助金)

項目	決算額	摘要
繰越金	99,326	
会費収入	160,000	32口 @ 5,000
雑収入	0	
合計	259,326	

(2) 支出の部(賛助金)

款項	決算額	摘要
事業費	43,885	
秋季研究会補助	38,520 <sup>Ⓐ</sup>	研究会 <sup>Ⓐ</sup> 参照
視察補助費	5,365	
運営費	38,000	
事務費	21,500	募金要項印刷費送料
会議費	8,500	会議菓子, 夕食代
募金雑費	8,000	
合計	81,885	

(3) 差引残高 177,441

賛助会員 ( )内の数字は申込口数

竹中工務店(2), 大成建設K.K(2), 野村工事K.K(1), 新工務所(1), 東洋熱工業K.K(1), 大林組(2), 暁建設工業K.K(1), 鹿島建設K.K(2), 昭晃堂(1), 松尾橋梁K.K(1), 信和工務所(2), 満点製作所(1), 諸橋工業K.K(1), 久米建築事務所, 岡本建築事務所(1), 清水建設K.K(2),

巴組鉄工所(2), 岡建工事K.K(1), 中央建設K.K(1), 山海建設K.K(1), 大道製作所(1), 織本建築事務所(1), 銀安興業K.K(2)

以上 24社 32口

# ○ 昭和38年東日本建築教育研究会総会議事録

昭和38年5月31日～6月1日

## 於 水戸工業高等学校

5月31日(第1日) 進行司会 諸江潤太郎(水戸工)

総会順序と議事記録要旨

総会(13.00～15.05)

### 1) 開 会

- |             |                           |
|-------------|---------------------------|
| 13.05～13.12 | 2) 理事長挨拶……中江理事長           |
| 13.12～13.17 | 3) 会場校長挨拶……原口武雄先生         |
| 13.17～13.26 | 4) 教育長挨拶……佐藤陸治先生          |
| 13.26～13.55 | 5) 来賓挨拶……文部省職業教育課長 河上邦治先生 |

河上課長

① 教員及び助手獲得文法に対する私見 ②設備に対する考え方(イ 新教育課程を円滑に行うための最低の設備 ロ 産振法第15条1項の補助金の補助金の裏付けのある基準)を含めて挨拶

質問 1 現在の教員の定数と今後の見透しについて (新潟工)  
教員確保のための昭和38年度予算措置は充分にある。  
その方法については各府県に話してある。

質問 2 聴講生の利用について地方では遠隔のためその利用が困難である。研修を得る方法はないか  
内地留学生を昨年より450人ふやした、夏休みの活用及び職業指導4単位のある大学への聴講生を利用する。

質問3.(意見) 設備利用方法について弾力性を持たせることについて、(山形工)  
特別設備の利用については、多額の費用を費して設置しても例えば、土木水理実験室のように、現行3年生の教材中1部分のためのものは感心できない。即ち利用度の低いものよりも各科共通のテストマシンの高いもの(例自動制御)を設置することがのぞましい

### b) 議長選出

議長として中江理事長

14.10～15.05 7) 議 事

㊦ 昭和37年度決算並びに事業報告

14.10～14.15 ① 昭和37年度事業報告……………関 先生(事務局)

昭和37年12月3日～4日 構造, 材料実験をテーマにして秋季研究会を開催又東日本建築教育研究会と近畿建連と共同で38年度標準学力テストを作成している。

14.15～14.20 ② ワークブック委員会より報告……………富 塚 先生(事務局)

昭和37～38年にかけて神奈川工 藤井 潔先生著「構造計算演習書」(双文社発行)が刊行された。

建築材料実験のオペレーションシートが刊行された

(定価1部110円 本部へ1部100円を送金のこと)

教科書発行として, 構造力学(39年度使用)建築材料(40年度使用)

建築計画(42年度使用)構造計算(41年度使用)建築歴史(42年度使用)の発行計画があること。

14.21～14.31 ③ 昭和37年度決算報告

岡登先生より別紙Print通り報告あり, 東京安田工 宮島先生より監査報告があつて了承。

14.31～14.49 ㊦ 役員改選 , 仮議長として横浜工 長谷川 先生

役員改選に関する会則条文の確認と慣例の報告があり, 理事各県1名を選出理事互選により中江理事長再選される。

14.49～14.50 ㊦ 理事長挨拶……………中江理事長

14.50～15.05 ㊦ 昭和38年度予算並びに事業計画……………中江理事長より報告

14.50～15.02 1) 事業計画として

1. 5月31日～6月1日 東日本建築教育研究会水戸総会開催
2. 11月～12月頃 秋季研究会を計画, 本年度は音響測定をとりあげる。
3. ワークブック 現在出していない科目について起草するよう富塚先生の方で計画中
4. 見 学

質問 1 夏休み等の長期休暇を利用した講習会, 研究会の開催は不可能か  
常任理事会にはかって出来るように努力する。



質問 2 研究テーマの長期研究計画にもとずいた講習会、研究会の開催がほしい。  
今後継続研究をもたせるように計画性をもって行い度い。

15.03～15.05 2) 予算報告……岡登先生より別紙予算書の報告あり  
以上で総会終了 (休憩 15分)

(2) 研究発表会(15.20～16.01)

研究発表会の座長として会場校長 原口 武雄 先生

- 15.25～15.35 1. 建築実習について 新潟工 上野 喜義 先生  
15.35～15.49 2. 神奈川県新設工業高校について 向の岡工 富塚 信詞 先生  
15.49～15.53 3. 建築実習の学習指導について 会津工 村越 保寿 先生  
15.53～16.01 4. 神奈川県新設工業高校建築科設備について  
向の岡工 高橋 吉明 先生

第2日 研究協議会(8.13～9.40)

8.13～8.53 研究発表「配筋に関する教材の作成について」金沢工 檜川 鉄郎  
配筋教材を系統的に再編成し、生徒の理解度を高めるため図式化したもので  
次の各項目について配列されている。

- 1) 配筋に関する十原則 配筋を考える前提条件としてその重要度を  
10原則にまとめ列挙したもの。
- 2) ラーメン配筋一般図 ラーメン全体について梁端定着長さ以外柱及び  
内柱に接する端部の差異や地中梁等についての  
配筋図を描いたもの。
- 3) ラーメン配筋と力学との関連
- 4) ラーメン配筋の理論
- 5) 柱の配置 二段筋、柱筋のしぼり加工、柱筋の立上り
- 6) 梁 スターラップのかけ方、引張り主筋の折り曲げ  
は場所と角度によっては危険であること。  
大梁の定着、曲げ材の断応力、剪主筋の位置  
小梁の定着、地中梁の定着
- 7) 床 版 スラブ外端、配筋を端近くにおいて腰掛けプロ  
ックを据える。大梁の主筋が直交する場合。  
四辺固定のベント位置、主筋副筋のピッチと継  
手位置、スラブの曲げ、三辺固定スラブ間仕切  
壁上梁のスラブ、同一スパン内のスラブ高低は  
ね出しスラブ
- 8) 階 段 三方固定、四方固定、持ち出しが犬で壁梁のあ

る場合、ささら桁式階段

9) 壁

定着、腹筋を梁のスターラップに兼用する場合  
開口部回り、耐震壁

10) 地中梁と基礎

11) 擁壁と防火壁

12) 壁式鉄筋コンクリート造

協議題

8.52～ 8.57 1) 「構造、材料」の学習指導法について 中江先生

提案理由

今後の科目の研究を行っていくのに、前回の研究方法を反省する必要はないか。

科目の具体的達成目標として、例えば建築材料については、木材、石材等各材料をどのように、どのようなことを達成目標として教えるか又学習指導法については各科目に共通的なものはぬきにしてその科目の指導について深く掘り下げたもの。又考查宿題等については従来の単なる例示程度で止めずどんな課題を出したら効果的かを研究する。

以上の件については余猶時間がなかったため後日各校共小石川工高岡登先生まで文章で送付することになった。

尚、昭和38年度秋季研究会の研究科目は「経営」と「工法」に決定する。

9.10～ 9.24 2) 実習の在り方について

提案理由

各校よりのアンケートの集録の説明が静岡工高関先生よりありとかく実習が木工実習に偏しがちであるが、これは過去の感があり、建築実習への脱皮の時期ではないか。

9.25～ 9.33 3) 建築科に視覚教材製作利用状況伺いと今後の版布願いについて 郡山工

提案理由

今後の版布願いについては→現在学会以外で市販されているものは、各科目の導入、まとめ以外に利用できる内容はすくなく、従って学習展開に使えるようなもの(例 設備実況図)があつたら本部等で増刷して販布してもらい度。又教科書になるべくあわせてもらい度。

これに対し、中訓 山田先生から建築学会でのスライド作成状況について下記の通り説明があつた。

1. エアコンを主とした設備スライド(150枚) 7月中
2. 建築材料スライド(100枚)
3. 基礎工法スライド(200枚) 近日中
4. 木構造については半分以上出来
5. 西洋建築史(含東洋)も200枚中120枚が完成

9.34～ 9.40 4) 建築教員助手の獲得方法について

新潟工

5) 建築設備の充実について

新潟工

4) 5)は取下げ

質問 教員の定数について 製図の場合の班別指導を考慮して定数は考えられているか。

考慮されていない。

閉 開

1. 茨教委指導主事 篠田宣秋先生
2. 山田先生あいさつ
3. 中江理事長あいさつ
4. 会場校長あいさつ

9.50 時

大洗荘発 見学コースへ

## 東京都立小石川工業高校 堀越喜与志

去る7月末、日本建築学会近畿支部主催の「工業高校建築科日程と内容は次の通りです。

テーマ：モジュール、プレハブ建築

日 程：7月23日 千里ニュータウン見学大阪府、深尾氏説明、信貴山にて、京大西山教授「プレハブ建築」

7月24日 信貴山にて、阪大岡田助教授「モデュール」

千里ニュータウンの規模の大きさは羨望の限りです。自然の素顔を残しながら、大団地がぞくぞく造られ、学校、公共施設などが計画に従って、次々に建てられ、整備されていました。

※：ここで、各社のプレハブを見学をしました。積水、大和、ナショナル、日本鋼管、本大産業など、さまざまなタイプのものがつくられておりましたが、「プレハブ」というにはまだまだであるということを感じさせられました。建設日数が約20～30日、費用が約7.8～10万円/坪、洋間では、それほど目障りな感じをうけません、和室の壁はどうもしっくりしません。これは、生活様式の改革がないと、本当の「プレハブ」が育たないことを暗示しているのかも知れません。それなのに各社とも、「平面は自分のお好み次第仕上げ外観の様子も、普通の木造建築に似せてつくる」努力をしないと売れないというジレンマに悩まされているようです。

名神高速道路も千里ニュータウンの直ぐ近くにあり、ほんの一部でしたが、バスで通過させて貰いました。一部開通して間もない頃でしたが、レジャーのため、琵琶湖、方面に出掛ける乗用車の利用がほとんどだそうです。また事故の大半がエンストだということでした。

23日の講話は信貴山にて、夕食后、浴衣がけで赤い眼玉をこすりつつ、「プレハブ」の将来に思いをはせながら西山講師の「プレハブ建築」を拝聴しました。

プレハブの現状は「今は、プレハブというにはほど遠いが、経済的、社会的、技術的な面で、将

来は発展する可能性がある。」という段階だと思えます。

24日午前中は「モデュール」について、岡田講師のお話がありました。現在建築の工場生産化、規格化にはこの問題を抜きにして考えられないことまた学会などで問題になっている点などをお伺いしました。3尺6尺に代るべき、基準尺が早急に、しかも後悔のないように決めて貰いたいものです。

各社の「プレハブ住宅」の写真を撮影してきましたので「プレハブ建築」という題でスライドを編集しております。

## ○ あとがき

夏休み前迄に発刊すべきところ、事務担当者たる私の怠慢で大変おそくなりましたことを深くお詫びいたします。

水戸の総会で金沢工高の檜川先生がご発表になった「配筋と原理」のプリントができあがりましてので秋の講習会、見学会にご出席の方々に差あげます（会員校の方には当日ご欠席の場合は後日郵送いたします）。

次に水戸の総会で会員校の先生より研究会の過去の歴史を教えてほしいと云う声がありましたので、過去の記憶をたどり下のような会のあゆみを綴ってみました。記憶に誤りがないとは申しあげられませんので、会員の方々でお気付の方は私のところ迄その旨ご連絡下さい。次の機会に訂正いたします。（小石川工高 岡登）

## 東日本建築教育研究会のあゆみ

	春（総会）	秋（研究会）
26年		発開会式（東京）
27年	沼津	
28年	高崎	（東京）都庁 藤岡，加藤
29年	長野	（東京）体育館 小野 薫
30年	宇都宮	（ 〃 ）NHKホール
31年	東京	（ 〃 ）羽田空港 安田工高
32年	高田	計画（弘前工高）
33年	甲府	力学（墨田工高）
34年	川越	造形（工大附）
35年	神奈川	ライトの研究（小石川工高）
36年	静岡	計画実験（工大 勝田研究室）
37年	郡山	構造実験（建築研究所）
38年	水戸	音響実験（東京）

追 記：

## 学習指導要領の手引改訂について協力方お願い

学習指導要領の手引改訂に備えて、本会ではその重要な改訂点の一つとして、科目の学習指導の研究を共同テーマとして取上げて来ました。しかるに改訂が来年度に行われる見通しとなり、東京近県理事で検討の結果、改訂についての資料を来年5月頃までに整える必要があり、科目の学習指導法については、別紙プリント「建築材料」の形式を参考として、資料を作成することになりました。つきましては、広く会員各位の御協力を得たいと存じます。それで、会員の中で担当の科目について進んで御協力下さる方もしくは研究協力者として御推薦頂ける方がありましたら、是非本部へ御連絡下さるようお願いいたします。

※ 実習・製図以外の科目を指しています。実習・製図については更に問題があり別途考慮いたします。